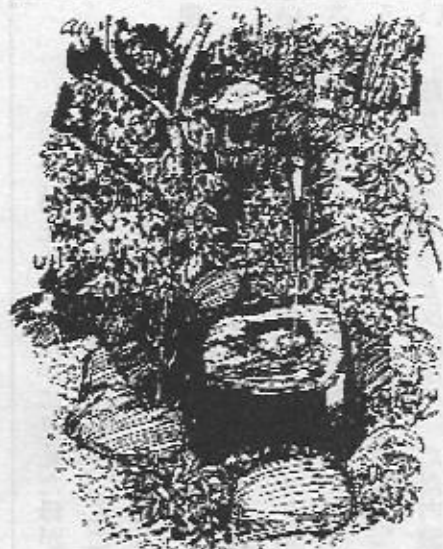




今回は2、5枚なので一部50円です



恩師の肖像 「まつおかはん」

まつおかはんは、須知農林から師範学校を出て田舎の教師になった。今では許されないような破天荒な教師生活を送っていた。郡内の小学校から赴任してきたまつおかはんは小学4年になった私に、初めて都会の匂いを嗅がせてくれた人であった。◆60年安保闘争のとき樺道子が亡くなった国会議事堂前のデモに参加し、そのときの喧騒と熱気を何回も授業時間に喋り続けた。耳をかたむける私たちは政治的な意味は解する事は出来ずとも、まつおかはんの熱のこもった喋り口調に固唾を呑んで聞き入った。ようわからんが、東京では大変な事がおきているんやな、とそのぐらいの事は理解できた。◆デモ隊との衝突場面に話がおよんだとき「女の人のはくストッキングは暖かいのう…」と口をすべらした。すると誰かが「なんで、先生知っとてんやいな？」と突っ込んだ。当時、田舎ではあまり見かけない女性の下着である。「そら、おまえなあ…」と先生は言葉を濁して口をつぐんでしまった。期待した通りの反応の先生に生徒達はいっせいに笑い出した。◆私たちが小学校を卒業しても、まつおかはんは家に招いては飯をご馳走してくれたり、いっしょに遊んでくれた。中学、高校と進むに従い益々親しくなった。まつおかはんは何より酒を愛する。生徒の誰が訪ねて行っても、いつも飲みながら「どうや、元気にしとってか？ 無理したらあかんで」と話を聞いてくれた。小学生の時と同じように笑顔をやさしく、怒ることは滅多にない。時間を気にせずいつまでも話を聞いてくれた。ずーと昔から、今にいたるまで、生徒ひとりひとりを一人前の人間として向き合ってくれた。「また遊びにおいで一な」と玄関を出て見送ってくれる姿に、まつおかはんの温かさを感じたものだ。◆まつおかはんは、さびしがりやでもある。連れあいを亡くした時などは、全てを無くしてしまった様に嘆き「もう、どうでもいいや」と投げやりな言葉をはいたりもした。連れ合いはガンを患い、2年あまり入院した。その間、近くの旅館に宿をとって病棟に通っていた。◆独りになった先生は「もうあかんわ。もうあかんわ」と電話口でつぶやいたことがあった。私が「何言うたってんやな。しかし、歳には勝てんさかいにな。しゃないなあ」と思い遣れば、「何いうんや、わしかて、これからやと思うてんのに」と強がりを言う。まだまだ口は元気だ。(嘉)

『べろべろ』

金沢には「べろべろ」という奇妙な名前の郷土料理があります。「恵比寿」というのが本来の名前のようです。

醤油味の出汁にとき卵を入れ、寒天で冷やし固めたお料理ですが、お祭りや正月などには欠かせない一品です。

ご飯のおかずにはなりません、寒い季節におこたでぬくぬくしながら食べるとたまらないお菓子みたいな一品です。

【材料】

粉寒天……4g(棒寒天の場合1本)

水……500cc

卵……1個

砂糖……大さじ2

醤油……大さじ2

しょうがの絞り汁……小さじ1(好み)

【作り方】

①粉寒天を良く洗って水の中にちぎって入れ煮溶かし、砂糖、しょうゆを入れ味を整えます。

②①が沸騰しているところへとき卵を流し、卵が浮いたところでマールプル状になるよう、そつとひと混ぜします。

③しょうがの絞り汁を入れて流し缶に入れ冷やします。

立木 理

編集者に「死」について書きなさいと言われて書き始めもう三回目になるが、少しも死に近づかない。死という事実は幾つも知っているが、死んでいゝる人の言葉を聞いたことがないからである。死んで生き返った人が居たとしたら、その人はまだ死んではいなかったことになる。自身の死を想像できても、自身の死を知る（覚知する）ことは誰も出来ない。

私の死とは、客観的事実としては「私の時間（意識）の絶対的停止」である。再び動き始めることはない。進むことも戻ることもない。修理修繕の効かない時計、停まっていることを自覚できない時計と言えよう。

人生時計というものがあるそうである。それによると、確か実年齢を二で割った数値が、現在の立ち位置だそうである。私の場合、五十七÷二＝二十九で、十九時（午後七時）に位置しています。夏場はまだ少し明るい、冬なら真つ暗。多少明るさ残っているが、もう電気を付けないと何も出来ない。これに従うと七十二歳で二十四時です、それ以上はオマケなのでしようかね。

さて、停止していたかに見えた母が蘇りました。病院生活が十数年、ここ数年は歩行も出来ず、同時に認識能力も著しく低下、この二年近くは流動食をチューブで入れてもらっている。言葉を発することも無く、横になったままである。時折身体の向きを変えようとして「うっ」と唸る程度でしかない。語りかけても殆ど反応なく、ただ内臓機能だけが働き、意思のない呼吸する物体となつて居る。

日曜日毎に様子を見に行く。一ヶ月位前から、少し変化が表れる。いくばくかの反応を表すようになった。語りかけると何かものを言おうとする。口元に耳を近づけるが、声がかもってはっきりしない。何度も聞き返すが、その内いつも通りの無反応に戻ってしまう。そして

「あんた誰？」といった目つきで私をみる。

先々週のことである。話しかけると、私が認識できたのか否か定かでないが、言葉を出そうとする。一言だけはっきりと、

「私、もう死ぬのか？」と。これまでと違い鮮明な音が届いて来た。一週間後、

「理やで、分かるか？」

と聞くと、かっと目を開いて、

「理ちゃん」

と子供の頃私を呼んでいたままに返事が戻ってきた。「分かるんやなあ、嬉しいわ」。母の兄弟の様子や状況を伝えると、大方分かった様子で、自分の弟の具合の悪さに悔やみめいた言葉を一つ二つ発する。一時間近くあれこれ伝え、どこまで分かっていたのか見当着かないが、帰ろうとする私に

「ここに居り」

と自分の意思を表した。

私たちが子供の頃の三十年前四十年前ならば、十分な看護も施設もなく蘇ることはなかっただろう。一度病に就けばそのまま逝ってしまうのが普通だった。母は、この十数年生きていたとはいえない。客観視すれば、全体的な経済合理性からは非合理的な存在だと言わざるを得ない。正しくは知らないが、逆に科学的・医学的視点からは呼吸している以上生きて居ることになる。

かつては幼児の死亡率の高さが問題になり、今では長寿が問題になっている。今年を賑わした後期高齢者、病院や施設の世話になっている方、家族の介護や支援で生活している方、自立している方様々な晩年がある。やがて私も命あるならその世代になる。誰もが避けて通れない。「死」を遠くにおいてるように、「高齢」もまた遠くに置いてきた。あの母も元氣な頃

「ボケたら殺して」

と言っていた。当時親が「ボケる」となぞ考えもしなかったし、それは余所の家のことではしかなかった。不幸なこと、忌まわしいこと、何でも余所の家のことだった。だが、この世で生じる総てのことは、良いも悪いもいつ自分のこととなるか知れない。油断も隙もないのがこの世である。死を迎える前に先ず自身の長寿と向き合わなければならぬ。

意思無く二年近くを過ごしてきた母が、再びその意思を表し復活した。私は、それを期待することなく、自己満足として母を訪ねていた。その日限りのことで、言葉を交し合えた最後の日となるかもしれない。だが、生きていると言えなくとも、肉体的に死ななかつたからこそ、その時が来た。

如何なる格好であれ命を保ち続けることが肝心だ。人知の及ばない何かがある、何か作用する。生きるのは自分のためであり、自分の力で生きていけると私は今直思っているが、真相は何かにかきかされ、誰かの為に生かされて居るようだ。

もしご高齢の方がこれを読んで下さっているなら、あなたのお子さんや近しい人のためにその命を一日も長く保つていただきたい。

今母は、社会の援助を受けて私のために一瞬といえども蘇りました。

幸福感

サラリーマン・エッセイ⑨

明石 幸次郎

アメリカのサブプライムローンが破綻して、その関連で世界の金融市場が揺らぎ、株価、為替に反映して、その影響が実態経済に大きな影を落とされています。殊に日本では経済成長の牽引役であった輸出産業が減速して景気に大きな影響を及ぼしつつあります。

景気が良かった時期に於いても、経済格差が国民の間に広がって社会問題になっていきましたが、景気が悪くなると一層、経済格差が広がり、それがより大きな社会問題（フリーター、ホームレス、自殺者の増大、教育格差など）になりそう、麻生首相・自民党も即時衆議院解散をたじろがせている原因でもあると思います。

さて、益々閉塞感の漂うこの不況の中で、我々が本当の幸福感を得るにはどうすれば、良いのでしょうか？

昔から、幸福のみを望み、それを追い求める人間はどこへ行ってもそれを手に入れることは困難であると言われてきました。幸福を得る為に経済的な欲望を満たさうとすればするほど、終わりの無い果てしない欲望ゲームの虜になって、絶えず“むなしさ”や“満たされなさ”を抱えざるを得なくなり、言わば“永遠の欲求不満の状

態”に置かれてしまうものです。これは、幸福を求めて不幸になる人生の逆説的な事実と言えます。お金も追いかければ追いかけるほど、お金の逃げられてしまうものです。

充実した幸福な人生を送ることは、古来、哲学者たちは“幸福のパラドックス”と呼んでその罫に落ちることのないよう諫めて来ました。

仏教においても、果てしないエゴの欲望の循環から抜け出すことでしか真の幸福は得られない、と言う洞察に立つて、修行や功徳を説き勧めて来ました。

又、ナチの迫害にあい、アウシュビッツ収容所での過酷な体験を書いた“夜と霧”の作者である、心理学者のフランクルによれば、誰もが当然のように人生の幸福を追い求めている現代人の生き方は、人間の本性に逆らった愚かな生き方ではないと言っています。「幸福の追求は、幸福を妨げる」「幸福を意識することによって、人は幸福になるための理由を見失い、幸福それ自体が消えていかなばならなくなる」とも言っています。

それでは、どうすれば良いのでしょうか。

しかし、どうすることも出来ないのが結論のようです。ただ自分が幸福になりたいと言うこだわり、エゴを捨て

て、自分のなすべきことに取り組むことで、そうしているうちに然るべき時が来れば、おのずと幸福は手に入るはずである、と言うのがフランクルの答えであります。やるべきことを継続することにより、水を一滴一滴、毎日甕に貯めることで、自分の使命感を見つけてくるのが出来て、これが幸福を感じることにつながるというふうです。

経済的な欲望を含めた名誉欲、権力欲、支配欲、金銭欲等の実現を求めることを中心にした人生は、幸福を実感する本物の人生ではありません。それよりも「自分を必要としてくれる誰かがいる」「自分にその人の為に何か出来ることがある。そして相手も自分のしたことを喜んでくれる」とエゴを超えた意識の中で自分以外の人の為に尽くすことで、家族との関係、地域の中の繋がりを見つけ、自分の存在感を実感し、自分がそこで、生かされているという気持ちを持つ。それが結果として幸福を感じることに繋がり、本当の自分を見つけることにも繋がると言われます。

都会であくせくして幸福感の捕まれない、居場所の見つからない“田舎のある中高年、若者”は、自分の待つ田舎に帰り、農業を通じ村興しをやることで個人も日本全体も大きく変わり、



経済的、物質的な欲望に左右されない真の幸福感を持たれるのではないでしょう

俳句

養女

- 草花の静かに揺れて初秋かな
- 虫の音に清澄の気持ちあふれ
- 八瀬の空青々と五体透く



帰省

空気のきれいな疎開先の長野から帰京したとき、東京の空気は空襲のころよりだいぶ良くなっていったものの、爆撃のあとが生々しく残り、雑然とした町にただよう焼け跡の臭いが胸に詰まりました。なれるまで時間がかかりました。

終戦を迎えて国民は虚脱状態に陥っていました。何しろ生きていかなければなりません。「食べる」ということに毎日の生活が追われていたのです。住むところがないほど困窮している人もたくさんいました。

家族の中で母を支えられるのは私しかいません。いままで母はお金がなく困っても、私に声をかけたことはありませんでした。ですが、東京へ帰ってきたときには、さすがの母も生活費に困りはてたのでしよう。私に「持っている？」とたずねるのです。私は、持っているお金をぜんぶ母に渡ししました。母は「ああ、助かった」と喜んでくれる。

父は東京へ帰ってからは、椅子に座って、家の前を右往左往する人をただながめているだけでした。茫然自失のような状態だったのです。



わが家には、隣のアパートと店二軒分の家賃収入がありました。戦前の家賃は安かったらしいのですが、終戦直後に何もかも高騰し、その凄まじいインフレを抑えるために新円切替え制度が公布されます。じつはこの制度は、財産税徴収を意図していたので、家や土地、借家などにビックリするような税金がかかってきたわけです。これでは借家の維持ができないと愚痴がでました。

借家があったから、父が働かなくてもどうにか食べていけてたわけですが、もうそうはいってられなくなりました。家賃を上げたくても、上げられないのです。仕方なく、家族が生きていくために、立地条件のいい借家から順次売りに出しました。家賃も入らなくなり、働き手は私一人です。午前中は町内会の事務所働いて、午後家に帰れば、ミシンを踏んで洋服を縫っ

たりしました。

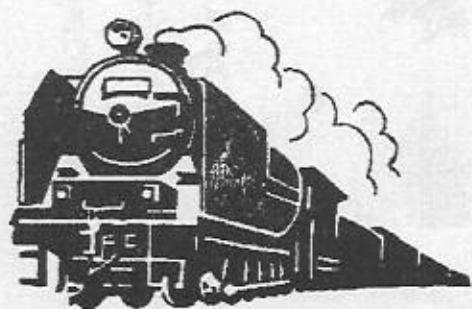
新橋駅前の闇市はどんどん拡張され、沢山の店が朝早くから場所取りをめぐって大変な賑わいでした。町並みは少しずつ整えられて、家のなかつた人も住むところを確保できるようになり、野営していた人もだんだん少なくなっ ていきました。他人の土地で我が物顔に商売していた人も見られなくなりま

昭和二十一年五月に大阪から電報があり、私は呼び戻されました。寂しそうな母や父を残して、荷物の整理をして持てるだけの荷物を背負い、汽車に乗り込んだのを思い出します。

あの頃は東京から大阪まで汽車で十二時間、夕方八時頃に東京を発って大阪に着くのは朝の八時頃。いまの柔らかな椅子と違って、当時は堅い木の椅子です。若かったですし、それが当たり前でしたから、あまり苦になりませんでした。車窓から見える風景は田圃ばかりです。

名古屋駅に着いたとき、電灯がともる向こうに見えた街並みはことごとく破壊され、焼け野原のような光景には驚きました。東京駅前よりも名古屋駅前の方がひどいものでした。

それから京都までは被害を受けた様子はなく、ほっとして京都駅で降りました。阪急電車に乗り換え、茨木の駅



に着いた時には「ふうー」と大きなため息がもれました。

家ではみな、私の帰りを首を長くして待つてくれていたのです。姑、主人、弟さんが出迎えてくれました。亡くなった父には、本堂へお参りしてご挨拶します。

戦争中疎開していた親戚の方々も、たくさんでてこられました。寺は皆さんが頼りにして、戦時下では六世帯の人々がカンテキを並べて共同炊事をして暮らしていたといえます。皆さんも私の帰宅を大層喜んでくださいました。久々に帰宅した私と挨拶を交わしてから、親戚の方々は三々五々家へ帰っていきます。

家族のみなも部屋に引き上げ、ようやく主人と二人きり。もう何も言うこともなくて、私は主人に飛びつきました。

「芥川山城と三好長慶」

福嶋 努

秋が少しずつ深まり、高槻の山の方でも木々が色づいてきました。

春の桜や秋の紅葉など、四季を通じて市民の憩いの場となっている摂津峡公園の、芥川を挟んでのすぐ東の山（三好山、通称城山）に、ずっと昔のことですが、高槻城とは別のもう一つの城、芥川山城が築かれていました。

芥川山城は、はるかに淀川流域を見渡せ、そして、芥川を見下ろす断崖に臨んだ場所にあり、自然のとりで（要害）を巧みに利用した戦国時代指折りの城郭でした。最も高い所に主郭を設け、周りを取り囲むそれぞれの郭には、縦横に土塁や空堀、さらに大手には石垣を配置するなどの見ごとな城の姿については、最近の発掘調査に基づく詳細な報告のお陰で、十分に偲ぶことが出来ます。

三好山の山上に、細川高国が芥川山城を築いたのは一五二〇年（永正十七）頃のこと。高国は、室町幕府の管領職にあった武将です。

高槻という所は、北に西国街道が通り、南に淀川が流れ、京都と大坂の間に位置して多くの人々が行き交う水陸

交通の要所でした。戦国時代に於いても大切な軍事拠点の一つであり、西国支配を推し進める上での重要な拠点でありました。

四国の阿波・徳島を根拠地とする武将三好長慶が、勢力をつけ勇躍として畿内に進出し、摂津のこの芥川山城に入ったのは、弱冠三十一歳の一五五三年（天文二十二）のことでした。それから約七年間、この山城から広く畿内に号令し、戦国武将の夢を現実のものにしていったのでした。

長慶は、芥川山城に入るまでに、芥川の西之川原にて、幕府の当時の実力者細川晴元軍を既に撃破しており、山城を本拠にしてからは、幕府の権威に頼ることなく、自らの意思で畿内の政治を思うままに進め、「芥川政権」ともいべき政権を樹立しました。

三好長慶は、領地支配にも力を注ぎ、真上・郡家村の水争いの裁決や、芥川流域の灌漑用水を丁寧に整備するなど、幾多の実績を残しており、戦国時代の村や地域に自ら進んで向き合おうとしていた積極的な姿勢が見受けられます。

真上・郡家両村の水争いの件は、一五五九年（永禄二）のことですが、芥川山城の裾を流れる芥川の用水をめぐる、右岸の郡家村と左岸の真上村との間で争いが起こり、両村はそれぞれ、

芥川から水を取った井堰の位置を示す絵図を長慶に提出して、裁定を求めます。長慶は事柄の糾明のために、家臣に実地を検分させたりした上で、村の代表者を芥川山城へ出頭させて裁きを行い、結局、郡家村の訴え内容を認めました。

次の言い回しは、農村においてもとても重要な水にまつわる伝承ですが、今も、郡家に伝わっております。「郡家極楽、津之江は地獄、なおも五百住は水地獄」

永禄十一年（一五六八年）、後に天下人となる「①」が、十五代将軍足利義昭を伴って上洛し、摂津平

定を目指して進攻しました。芥川政権を引き継いでいた三好一族は、この時、いとも簡単に降参し、芥川山城を明け渡してしまいます。その後は、将軍義昭の家臣和田惟政が入城しました。そして、惟政は、一年後には高槻城へ移り、今度は、高槻城の基礎づくりに力を注ぎました。高槻城のその後の繁栄は、惟政の貢献に負うところが大きいのです。

時代の流れとともに、芥川城は、平城である高槻城に取って代わられるということになりました。鉄砲の普及などで、山城は無用になり、時代の外に置き去られてしまった訳です。

秋で色づいた三好山山頂の、長慶を今でも祀っている、ささやかな祠に接すると、戦国武将の夢の跡がそこはかとなく偲ばれてきます。

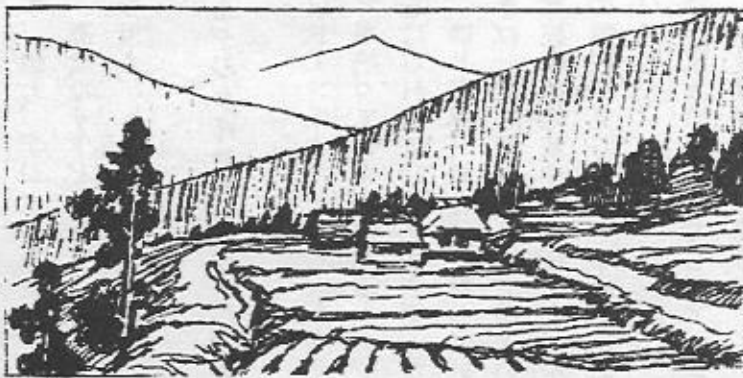
（問）文章の中の「①」に当てはまる言葉を、次のア・イ・ウから一つ選んで下さい。

- ア、明智光秀
- イ、織田信長
- ウ、豊臣秀吉

★ 芥川だよりNo.26の

クイズの答え

「城跡公園の右近像」の答えは（イ、二重の堀）でした。



あなたの街の電気屋さん

ダイコク電化 山川 修

◆・・・あと999日

こんにちは、芥川商店街の電気店「ダイコク電化」です。

いきなり「999日」と掲げ、何だろう？と思われるそのあなたの数字はこれを読んでいただいている皆様に関係する数字なのです。

前置きはこれぐらいにして・・・実はこの10月28日（火）から999日後には、皆様が一覧になられている「地上アナログ放送」が放送終了する日なのです。もうすでにカウントダウンが始まってますよという呼びかけなのです。

ズバリその日とは、2011年7月24日です。あと3年を切りました。なぜ、私がこれほどヤイヤイ言うかとおっしゃすと、「デジタル難民」の方々が出てくることを心配しております。よく、このような話をお客様にしますと、「うちの家に限ってそんな事はないよ！今、きれいに映ってるしな」とおっしゃる方がおられます。しかし、現実には前述のように必ずやってくるのです。

だから、今お使いのアナログテレビ

では、映らなくなりますよ」と訴求活動をしております。

今後切替わる「地上デジタル放送」もすでに始まっており、いわゆる薄型テレビではきれいなデジタル放送を見ることができません。999日後も問題なく見続けることが可能です。

◆そろそろ準備をはじめませんか！

999日といっても月日の経つのは早いもので、あつという間にやっけます。間際にはバタバタ焦って、商品選びや映る環境（アンテナ等）を整えるなど、時間があるうちに準備していただいた方が失敗は少ないと思います。私たち999日後、1000日後が想像もつきません。映らなくなったご家庭がパニックにならないか心配しております。

◆地上デジタル放送を見るには？

そもそも、地上デジタル放送を見るためには「地上デジタルチューナー」が必要となります。デジタル放送対応薄型テレビにはチューナーが入っています。その他にDVDレコーダに地上デジタルチューナー内蔵タイプも出ております。アナログテレビでもこのDVDを接続すれば、見ることはできます。シンブルに地上デジタル放送対応チューナーを取付けると視聴可能な

ります。但し、デジタル放送特有の高画質・高度なサービスは受けることはできません。

◆地上デジタル放送を見るための環境？

UHFアンテナでテレビ大阪やサンテレビが映っていますか？地上デジタル放送はUHFアンテナが必要となります。映りが悪い場合や、映っていないときは一度ご相談された方がよいです。電波障害地域や、現在ケーブルテレビの電波で見られている場合はおおむねOKです。

一部、電波障害地域でも、アナログ放送しか受信できない場合もござい

◆とても便利な地上デジタル放送

そんな、地上デジタル放送は高画質・高度なサービスが受けられるのです。今までのテレビは放送を見るといった「受身」でしかなかったのですが、これからは双方が情報のやり取りをする「送受信」の機器となるのです。受け側としては、データ放送である文字情報。ここには、地域の天気予報や、最新のニュース、趣味、番組情報などさまざまな情報が常に更新し、皆様にお届けしています。更に、ネット環境を整えると、テレビ側とご家庭がつな

がりクイズ番組の参戦、見たいとおもった映画などを取り込みたりといったように、参加型テレビの時代がもう来ているのです。

今までのテレビとは概念が全然違うものとなっています。

これからは、そんなテレビを皆さん楽しんで見てください。

◆最後に

皆様、これを機会に一度ご家庭のテレビをチェックしてください。画面右上に「アナログ」という文字が入っていたり・・・

以下のような「2011年」というステッカーがテレビに貼っていたり・・・

そんな、テレビをご覧の方は地上デジタルのご準備をおススメします。

2011年7月24日までに
アナログ放送は終了します。
それ以降、
アナログテレビについては、
デジタルチューナーなどを
取り付けなければ
視聴できなくなります。

結婚

須坂の「やまと」は陸軍の寮として徴用され、戦時中一家は松本の浅間温泉にある別宅に身を寄せた。この別宅はもと

もと保養のためではなく、商魂たくましいやり手女将が置屋を営もうと考えてつくったものである。賑わいを見せた須坂の繁華街はもとの姿を取りもどすことはないであろう、戦争が終わったら「やまと」の拠点を松本の温泉街に移し、新たな商いを拓こうと考えていた。

女ばかりの一家は敗戦を松本でむかえた。松本は爆撃の被害にあうことはなかった。東京のように焼け出された人たちが路頭にあふれるということはなかったが、やはり食についてはひもじい思いをした。

敗戦の年、千寿子は二十歳になった。まだ混乱がさめやらないころから、養母である女将は、婚期をむかえた千寿子を結婚させようと、見合い相手を探した。

千寿子は結婚にはあまり気がすまなかった。自分を産んで間もなく亡くなった母式部が出逢ったような、女優松井須磨子が出逢ったような、そういう恋に憧れをいだいていたようだ。

養母のつよい勧めで、いくつか見合いをした。千寿子はことごとく断ってしま

う。その断った相手の中に、いずれ結婚することになる男も含まれていた。

養母はついに、千寿子の意志と関係なく縁談を決めてしまう。千寿子は「断って」といっても、耳を貸してくれない。結婚するという前提で話がどんどん進んでいってしまった。

養母としては、「やまと」の跡を継ぐ子を産んでくれさえすればいいのだ。千寿子には、その男と結婚して子をもうけるなんてことは考えられなかった。千寿子は追い詰められていく。そして選んだ道は、松本を去ることだった。

千寿子には妹が二人いた。千寿子のすぐあとに養女となった農家の娘と、もう一人は芸者の子で、少し歳が離れていた。次女にあたる妹とはまったく反りが合わなかった。彼女は千寿子が拒絶した男と結婚し、「やまと」とどまるが、置屋商売を継ぐことはなく、「やまと」の財産を相続することになる。

末の妹は、養女にしたときから女将は芸者にする心積もりでいた。置屋「やまと」の売れっ子芸者に育てあげようと思っていた。それにたいして千寿子はつよく反対し、妹には「ぜったい芸者になんかならだめ」といいきかせていた。彼女は千寿子と共に松本を去って、長野の実母のもとに帰ることになる。

千寿子の行く先は、たよれる友だちがいる須坂しかない。数年ぶりの須坂に戻

った千寿子は、友だちの勤める高水社という、蛋卵製造業の共同組合に就職する。須坂で暮らしはじめた千寿子はまだ不安であった。連れ戻されて、あの男と結婚させられるのではないか。

須坂で一人の男と再会する。彼は県の地方事務局に勤めていた。松本で見合いをして断った男だ。面倒見のいい男で、周囲から信頼されていた。千寿子は何を勘違いしたのか、その男のもとにはしるのである。彼と結婚してしまえば、「やまと」に連れ戻されることはあるまい。だが、それは新たな苦勞の始まりでもあった。

千寿子二十五で結婚する。姓が変わり、もとの名のミチコにもどって、「やまと」との縁もきれた。内輪だけのささやかな式には、数人の友人に混じって、父タケシの姿もあった。「やまと」の関係者は末の妹のみであった。

善光寺の近くに家を借りて、新婚生活が始まる。翌年には娘を産み、三年後に新居を建てたとき、新たな苦勞の種を産んだ。

結婚して家庭をもったミチコには、後ろ髪を引かれるような気がかりが一つあった。「やまと」のおばあちゃんのことである。幼いころから可愛がってもらい、ミチコ自身も「おばあちゃんがいなかったら、私はどうなっていたかわからない。

いまの私があるのはおばあちゃんのお蔭」と恩義に感じ、おばあちゃんに会いたがっていた。だが、二人の子をもったころ、おばあちゃんは亡くなっていた。その死は報されることなく、ミチコが知ったのは数年後である。

「あれほど面倒を見たのに……、血のつながりがなければならぬかねえ」とおばあちゃんは、疎遠になって顔も見せないミチコを嘆き、寂しそうにつぶやいていた。そのおばあちゃんの言葉を、死の報せとともに知ったとき、やはりミチコにはショックであった。

せめてお墓参りはしなくては、と口癖のようにいつていたが、その場所を知る妹も亡くなり、果たせないままになった。家の仏壇にはおばあちゃんの位牌がおさめられている。毎朝その位牌に手を合わせ、おばあちゃんを想うことくらいがミチコのできる精一杯であった。

*

お袋ミチコは七十七のときたおれ、植物状態になった。それから六年が経つ。肺炎やと尿路感染症で入院することがあったが、全般に安定している。基本的に丈夫なのだ。

六年介護してきて、歳をとったという感じはしない。顔はシミだらけだが、皺はない。身体はつやつやとしている。お袋はこの生のかぎりを生ききればいと思っている。何年かかろうとも。(了)

冬の槍ヶ岳

梵店主

マッターホルンの山容によく似た槍ヶ岳は人気のある山である。夏山シーズンにもなれば蟻の行列のように山頂まで登山者がつながる。しかし、冬場は誰もいなくなる。

よっちゃん達の山岳部は年に百日ほど山に入る。その山行きの大半は雪か雪渓があるコースやシーズンが選ばれる。それは部の目標が雪山の登山にあり、いつかは遠いヒマラヤ未踏の山々を登ろうとする部の伝統から来るものであった。雪が張り付いた尾根を登るのは、危険で難しい。

槍を夏に登ったからと言って、冬の槍に登れるものではない。登山ルートや装備、気象判断や登山技術など総合的な力を要求されるからだ。

よっちゃんは、初めての冬山のリーダーとして登る山に槍を選んだ。

「冬山は怖い、雪崩や豪雪による圧死、凍結した尾根からの滑落などによる遭難など、考えれば考えるほど怖い」

出来れば行きたくないがそんな事は言えない。「新人の一年を冬の三千メートルの稜線に登らせる」という目標を達成して、後輩に技術を伝えなければいけない

からだ。

十二月の末、部員七人を乗せた車は夜明け前、新穂高のバス停に止まった。新雪は膝下であるが、トレースがなければ相当のラッセルを強いられそうだ。

バス停から滝谷出合いを目指す。曲りくねった林道を登り牧場跡を通り抜け、先輩の眠るレリーフを熊笹の中に訪ねた。国立公園の中なのでレリーフは設置してはいけないので隠れた所に埋め込まれている。雪が覆ったレリーフを探すのは大変だ。

新雪の積もった沢筋の夏道を進む、滝谷の出合いでは雪崩に注意する。やつとるの思いで槍平の小屋たどりつき、テントを張る。テントを張る所も雪崩が来ないか十分に気をつける。

実は一ヶ月前の十一月にも偵察を兼ねて槍平に来ている。その時は積雪が少なく中崎尾根を利用して、西鎌尾根を経て槍の穂先に立った。

今回登るルートの一部を登っているが、今回は積雪の様子がまるで違う。山

は天気次第である。特に冬山は天気によって同じルートが非常に安易になったり難しくなったりする。高い3千メートルの稜線で風と雪の猛吹雪に遭えば、立っているどころか息をするのも容易でない。

よっちゃん達が今回登ろうとしているコースは南岳西尾根から槍に登ろうとい

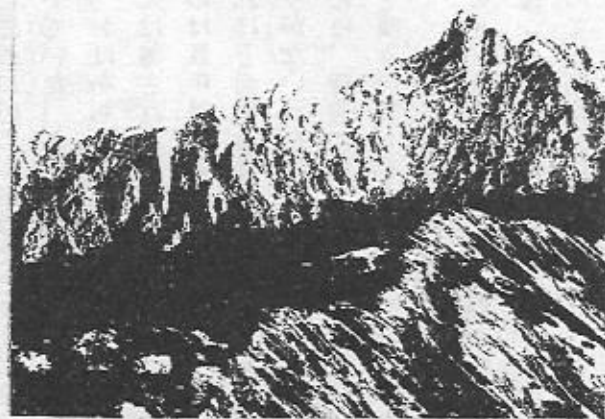
う計画である。この尾根は上部にヤバイ箇所がある。ナイフリッジにマッチ箱と称する岩塊が乗っかっているところである。

両側は切れ落ちて高度感には抜群なのだが落ちれば助からない。この通過が大きなポイントになる。もう一ヶ所は槍の肩から穂先への岩場である。氷雪により夏道が覆い隠され氷壁になる心配である。さらに雪崩の可能性の高い急な雪面の横断がある。

これらの所を一年が安全に通過する為にザイルを持参して張ることにした。使い古したザイルを何本もザックに入れて運ぶのは大変である。しかし、遭難を絶対に防止するためには止むを得ない。よっちゃんは考えた。

槍平には避難小屋があったが利用しなかった。小屋はテントに比べ寒い。テントのように熱気が籠もらないから、風が吹き抜け耐え難いものになる。もうひとつ大事な事がある。食料のデポである。

十一月に来た時に置いてきた一斗缶である。詰め込んだ食料が三つとも荒らされずに在るかという問題だ。今回は運よく完全な状態であった。缶は普通小屋があるところでは小屋の中に、山岳会名と使用予定日を書いておく。誰かが非常事態で使用した場合、連絡出来る様に考



『弱者の気持』

母の介護をして気付いた。
今の社会は弱者に優しくない。
例えば、エレベーターがない駅がある。
田舎に行くほど多い。

母の実家の最寄り駅はそんな駅だった。車椅子が使えないので、手前の駅で降りてタクシーを使わざるを得なかった。

また、和式の便所がまだ多い。
特に町医者診療所。年寄りにはしゃ

がみ込めない。やむなく、ゴミ箱を尿瓶代わりに使ったことがあった。

介護をして以来、弱者の気持が少し分かるようになった。(龍)



一八〇〜二五〇字くらいで
あなたの心のつぶやきをお寄せください

連載

爺捨て山③

梵店主

「男のひとは哀れだねー」

この言葉を幾度聞いただろうか。仕事を定年まで勤め上げて、期待した定年後をイキイキ暮らせる男は少ない事実を表わしている。

そばで見続けてきた妻の視線は厳しい。男が仕事で疲れた以上に妻達も辛抱して来ていたのだ。定年と言う区切りで男達は更なる辛抱を妻達に求めようとするが、耳を貸す女達は少ないだろう。

七十歳を超えた先輩に電話をすれば例外なく奥様から次のようなお言葉を頂戴する。

「ねえ、お願いだから主人を連れ出してください。金がいくらでも構いませんから、家に居られたら困るんです」
一度も出会った事が無いので喋りやすいのかもしれないが本音だろう。

会社でトップまで登りつめた知人などは悲しい。彼の奥さんなどは、露骨に主人と家庭内別居のような言葉であった。

男は錯覚していたのかもしれないが、もう取り返しがつかない。

そんな想いを、山で自家製造した濁酒とともに飲み込んでしまおうと考えたのである。(つづく)

「槍ヶ嶽」(中西悟堂「山岳詩集」から)

槍の岩壁を攀ちてゐるあひだ

下界では夕立の稲妻が

谷々を葵のやうに明るくしてゐた。

二十の指は鎖よりも

ギザギザな岩の感触を欲してゐた。

私は魚のやうに岩のふところを出つ

入りつした。

目がすれすれに読みつづけるのは

花崗岩のうへ『時』の擦痕。

チムニイをまたぐはづみに

私はすぐ目のうへの雷鳥の肢をみつ

けた。

谷あひで鳴る雷鳴のひびきが

虚空の岩に砕けてゐるあひだ

美しい決断と夢中が私を支配してゐ

た。

この詩には、落下の恐怖は感じられない。「稲妻」とか「雷鳴」という猛々しい自然現象も、岩を攀る愉しみ、悦びに不安の影を落としてはいない。「岩のふところを出つ入りつ」する魚に不安があるはずがない。岩を攀ること、そのものを愉しんでいるのだ。

この詩は僕に、学生時代にはじめて北岳のバットレスを攀ったときの、あの明るくすがすがしい気分をよみがえらせる。

あのころ僕は、生意気にも、登攀技術には自信があり、どんな岩も登りきってみせると思いついてた。そんな僕にとつてバットレスはむずかしい岩場ではなかったが、あの爽快で愉し気分は鮮明に記憶に刻まれ、あんな岩登りはその後にも経験したことがない。

穂高の滝谷のような、陽があたらず湿っぽい岩とちがつて、さらつと乾いていて、「ギザギザな岩の感触」が快感なのだ。

凸状のカンテに身を躍らせ、切りたつフランケにはりつき、上へ上へ、ピークへと登りつめてゆく。

あのとき確かに、バットレスを攀じる僕は「美しい決断と夢中」だけに支配されていた。(猿)



老いの先達

早寝、早起き。早く目がさめて寝て
いられるものでもなし、目はさめてい
るが外を見れば、まだうす暗いし、起
きてしまおうか、どうしようかと戸惑
う昨今である。

我が家の愛犬、オリブが、この半
年程で急激に老いが進んできたよう
に思われる。

散歩に出かけると、私をまず引つ張
つてくれる。それに甘んじてついてい
く。人に会ってつい話はずんで、待
ちくたびれている犬のことなど一向
にかまわない。「それじゃ」と言っ
て別れて、いよいよ力強く引つ張つて
くれるものと思っていたら、突然、目
をむいて倒れてしまった。

どうしよう。死んじゃったのかと思
つて体をさわってみた。息をしてい
る。ハアハア、体温がある。えらいこ
つちや、だきかかえて家に急ぐ。

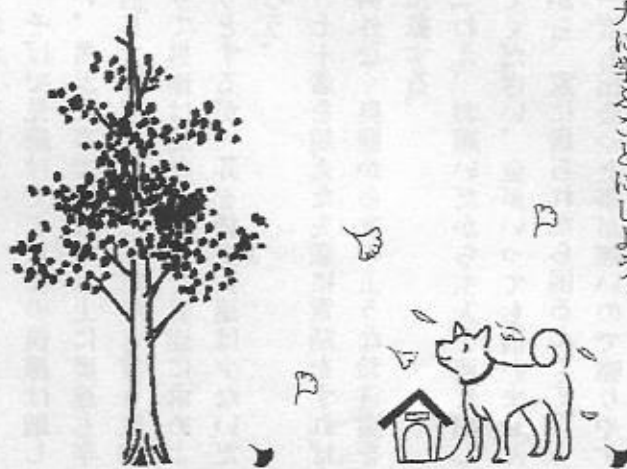
どのように歩いてきたのだろうか。
誰かが声をかけてくれたようだが、よ
く覚えていない。

「ヨイショ」と板の間にねかせて、先
ず指でさする。「しつかりしてや。死
んだらあかんで」と声をかけると、
フツと目をあけて私を見つめている。
ヤレヤレ気がついたんや。

息子にたのんで動物病院へ連れて
いく。人並みや。レントゲン、採血、
診察一通り。

犬が自身の体が老いていく変化を
感じているかどうか分からない。しか
し、人間の私には肉体の老化は手にと
るように分かる。

我が家の愛犬は老いの先達である。
せいせい、老いても、自在な生き方を
犬に学ぶことにしよう。



理不尽なこともある

人工呼吸器をつけられ、口もきけな
い。何を考えているのかも分からない
昏睡状態。

看護師さんの呼びかけにも応じな
い。それでも、看護師さんはやさしい

言葉をかけ、暖かい眼差しを送って下さ
る。

だが、どんな我がままな患者であつて
も、看護師さんたちにとっては自分たち
の存在を見つめ、それに反応をしめして
くれる患者のほうが看護の遣り甲斐が
あるのではないかと思う。私には到底出
来ないことを、テキパキとこなす。

時折大きな声が聞こえることがある。
廊下でしばらく時間をおき、胸をなで
おろす。いつまでたつても相性が悪いら
しいと感じることもあり、でも感謝。手
を合わせる。「わがままを許してやつて下
さい」と。

「明日また降りつづいたとて、あさつて
は晴れるかも、あさつて晴れなくても五
日先、七日先には、きつと日の照りがあ
るんだよ」と励ましてくれた友の言葉。
「悪いことばかり続かない」と励まして
くれた。

編集後記

「如何に死ぬか」という大それた問題
をジツクリ考えようと「死」のテー
マで投稿をお願いしております。遠く
近く重い問題にも関わらず、身近な
ところからテーマに迫ろうとされてい
て、正直、毎回原稿が楽しみです。

投稿者が回を重ねるに従い「死」と
いう事に向き合い、想いや考えが変化
していきます。読み手にはその変化が
楽しいかもしれない。実際、私は楽し
いです。「青臭い！」とそんな意見も聞
こえてきそうですが、どうかバカにさ
れず、共に考えていただけたいいな
あと秘かに願っています。こんな事
言ってる自分が恥かしくはあるので
が、じっくり向き合ってみたい、と、
やはり思ってしまうテーマなのです、
『死』という事は……。

11月の芥川商店街の催し

★年末大売出し

11月29日(土)～

12月7日(日)

ガラガラ抽選

西伊豆旅行が当たる

※

★第18回 亀屋寄席

11月9日(日) 11時開演。

割烹旅館 亀屋

電話 072-685-0123

※

★11月10日(月)

干支「丑」キツト販売開始

¥3150(消費税込み)

縮緬の古布で作る手のひらサイズの丑です

数に限りがあります

着物から服を仕立てます 梵～ぼん～

(喜)